
真剣でこの世界にやってきた

かもし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真剣でこの世界にやってきた

【Nコード】

N6474Z

【作者名】

かもし

【あらすじ】

主人公【明】はいじめを受けて中学2年から3年のクリスマスまでひきこもっていたが、とうとう明は親にも追い出され自分の行き場を失う・・・そして明はとうとう飛び降り自殺を決意した・・・のはずなんだけどなぜか自分が目を覚めたときには【真剣で私に恋しなさい】とまったくおんなじ世界にきていた・・・そこで彼は一人の男性にあった・・・その名は雅、そして雅をこういう「今日から俺はお前の父さんだ、よろしくな」

そう・・・すべてはここからだっ

初めて投稿するんで

よくわからない文章や誤字、脱字があると思いますが・・・
よろしく願います！！

真剣で考えなさい！！（前書き）

自分は初めて小説投稿しますのでこれからオナシャス！！

真剣で私に恋しなさい！！の派生小説です。

一応更新はまあまあだと思っていてください。

それではよろしく願います！！

真剣で考えなさい！！

僕の名前は「後藤 明」

僕【真剣で私に恋しなさい】というアニメを見ながら部屋の中1人こもっていた

「はぁ・・・俺もこの世界にいききたいなぁ・・・2次元いいなぁ・・・」

僕はそう思いながら日々のひきこもりになっていった原因はいじめ・

僕はデブで女子からも男子からも嫌われているそのおかげで中2から中3の今までひきこもっているのだ。

そして僕のこの現実逃避生活にも終止符が打たれるときがやってくるその日はクリスマスだった、僕はいつものようにPCをつけゲームしたり掲示板みたりしていた

・・・

誰かが俺の部屋の近くまでやってきた俺はどうせトイレだろうと思つてPCをしていたら親父が入って来た

「おい、お前は今日でさよならだ、今日の6時に施設にいれるからな」

そう・・・とうとうこの日がやってきたのだ・・・

僕はもうこれでこの世からはおしまいなんだなと思つた・・・

僕は気が付いたら家から出て走っていた親父の声がだんだん遠くなくなつて行く・・・

僕はなぜか学校にきていた、そう僕はここで人生を終わらせようとおもつた

あぁ・・・もし死んだら「真剣で私に恋しなさいの世界にいききたいなぁ・・・」

僕はそう思いながら飛び降りた・・・顔にはいろんなものがでてい

雅「お前の今の精神力と力のなさど体系と顔をよく見てみる」

俺「ぐっ……（絶望）」

俺は……2次元でもひきこもりになるのかな……いや、ならない！！絶対だ！！

これは神が与えたチャンスだ！！絶対ものにしてやる！！絶対にな！！

俺「僕は負けませんよ、神が与えた最高のチャンスもたらすわけにはいかないでしょう」

雅「そうか、まあ困ったときは俺になんでも相談しろ一応俺は明の父親だからな」

俺「雅さんあなたはなにものなんですか……！？」

雅「その説明はあとだ……そうだ！！お前は川神院にするか？それとも島津寮どっちがいい？」

俺「うーむ……川神院はいろいろと死にそうだから俺は島津寮でいいや」

雅「まったくお前は……ハーレムなんて期待しても無駄だぞ？」

俺「俺はあんな武道だらけの生活は嫌だ！！しかもあそこ温泉あるだろ」

雅「まあ、いいだろう」

俺「雅さんはどうするんだい？」

雅「俺も少しはそこにいてやれるが俺は四天王だ、いろいろと忙しいから毎日はお前の面倒みてやれんと思う、それでもいいな？」

俺「ああ、もちろんだ……って四天王？なにそれ？」

雅「だああああああああああああ！！今のは聞かないことにしてくれ」

俺「あ……ああ……わかった」

こうして俺の新しい生活が始まるのだった

真剣で課題をクリアしなさい（前書き）

雅がくりだした課題とは・・・

真剣で課題をクリアしなさい

雅「ほら、ここが島津寮だ、まあ連絡はいれておいてやったから後はお前に頼んだぞ」

俺「ちよつとまって雅さんまだ聞きたいことはやまほどあるのにイイ！！」

雅「俺は9時には戻るからそれまでゆつくりしといてくれや」

俺「わ、わかった・・・」

いや、いくら二次元とはいえども・・・やっぱ1年半ひきこもってたせいかとても人と会話するのは怖い・・・

おばちゃん「あんたが、明君ね今日は寒いから早くいらっしやい！」

あ、あれは麗子さんか・・・やっぱアニメで見たのとそっくりだなあ・・・

俺「あ、はい（挙動不審）」

麗子「さ、あんたは1回の一番奥の部屋だから」

俺「わかりました」

麗子「それと1階は男子の部屋2階は女子の部屋と分けられているからそこも気おつけてねもし、男子が2階にあげれば・・・その時は・・・まあ、お風呂は1階にあるから」

俺「わかりました、今後ともよろしく願います」

そういつて俺は頭を下げた

麗子「うん、偉い子だね今日はサービスに夜ご飯は卵焼き付けとくわ」

俺「ありがとうございます」

麗子「それじゃあ私は晩御飯の支度でもいつてくるね、なにかまたわからないことがあれば行ってちょーだい」

俺「はい、そのときはお世話になります」

なんとか麗子さんとの挨拶も終えて自分の部屋に戻って行ったところ

るだったにしても島津寮ってこんなに騒がしかったんだな
俺「さーってと、ここが新しい部屋かー ん？なんだこれ」

そこに【明へのプレゼントだ 雅】

と書かれた封筒とともにでかい箱があった封筒の中には手紙がはい
っていたよんでみると

メリークリスマスー！！

君にはとっておきのクリスマスプレゼントを用意したよ
といっても私生活類だけどね

携帯と洋服と生活用品を置いたよ

まあ、今日はゆっくり休んでくれたまへ

雅より

そう手紙には書いてあったのだ

俺「携帯だー！！」

どんだけ優しいんだ雅さんはー！！

俺「スマホか？アイホンか？ジョー○スか？uuか？KJJJIか？」

中身を見ると I p o n だった

俺「ジョー○スきたー！！！！！！機種はなんだ？」

KJJJI

俺「KJJJIきたー！！！！！！uuキター！！！！」

俺のテンションはまたしても爆発してしまった

麗子「みんなーごはんだよー」

そういつて俺はアイポンを後にご飯にした

俺が食卓についたら

源さんと京と大和とキャップがいた、うむやっぱアニメと一緒にだな

麗子「今日からこの寮に住む明君、皆仲良くしなさいよ」

俺「皆よろしく!!」

そういつて俺は元気よく挨拶した

キャップ「おう、俺は風間翔一、キャップと呼んでくれよろしくな
!」

大和「俺は直江大和だよろしく」

源さん「俺は源 忠勝だよろしく」

京「・・・」

大和「こいつは京、ちょっと根暗だが根はいいやつなんだ」

うむ・・・やっぱアニメと同じだな俺はそう思いながら飯にした
キャップ「明はどこからきたんだ?」

この時なんていえばいいんだろうか・・・異次元転送とかいったら
完璧変人扱いされるし・・・

そうだ地元をいおう!

俺「俺は福岡からきたよ、ちょっと親の都合でこっちにくるはめに
なっただがな」

キャップ「その親は?」

俺「ん?知らね」

俺は適当に嘘をつきながらいろんなことを皆と話していた
よかった・・・なんとか俺は会話くらいはできるみたいだ

しかしこの体系どうにかしないとなあ・・・太りすぎて1カ月もた
たないうちに女子から嫌われてしまう・・・そういえば雅さんは四
天王とかいっていたな、しかもあの人なんか強そうだし、今日頼ん
でみるか

俺は風呂からあがったときには雅さんがいた

雅「よあ、仲良くやってるじゃねーか」

俺「はい、おかげさまで 所で話があるんですが、いいですか?」

雅「ん？なんだ？」

俺「俺は明日から何年何組になるんですか？」

雅「お前は1-F組だ、学力は心配するなお前よりも頭の悪いやつはいるから」

俺「えええ！いきなり高校生ですか！！」

雅「そうだよ、どうせあと少しで卒業だからよかっただろ」

俺「わかりました、それじゃ最後に一ついいですか？」

そして俺は雅さんの前で土下座した

俺「雅さん！！俺を強くしてください！あなたは四天王なんでしょ？聞き逃せといつても俺は絶対にそれだけは聞き逃せません」

雅さんは困ったような顔をしたがこう言った

雅「じゃあお前が川神百代に勝ったら俺の弟子にしてやろう」

俺「わかりました！！　　は？」

・　　そうそして俺はいきなりクライマックスな展開へ進んでいった・

真剣で川神百代を倒しなさい（前編）（前書き）

風間ファミリーとも仲良くなった明だが、雅の一言ででかい壁に突き当たる・・・さて・・・どうなるんでしょうね・・・

真剣で川神百代を倒しなさい（前編）

僕はまだ布団の中今日は人生で一番の憂鬱だった・・・

もしかしたら死ぬかもしれない・・・最低でも半殺し・・・吐血・・・

・顔がぐちゃぐちゃ・・・

ば、ばかそんな変な妄想はやめろ！！もしそうなりそうなら参りま
したすれば・・・

いやだめだ！！逃げちゃだめだ

逃げちゃだめだ逃げちゃだめだ逃げちゃだめだ逃げちゃだめだ逃げ
ちゃだめだ逃げちゃだめだ逃げちゃだめだ逃げちゃだめだ逃げちゃ
だめだ逃げちゃだめだ逃げちゃだめだ逃げちゃだめだ逃げちゃだめ
だ逃げちゃだめだ

あれ？なんかこういうのってほかのアニメで・・・まあいいか
とりあえず俺は起きることにした今は6：00かぁ俺なりにずい
ぶん早起きしたなぁ～なんか静かな・・・多分皆寝てるだろう・・・
・いいや、ちよつと散歩しにいこ

俺はさっさと着替えて島津寮からでて散歩することにした

俺「う～ん空気おいしいなぁ～」

そう思いながら僕は知らない景色を見ながら楽しんでいた

そうしているうちに俺が雅さんと初めて出会った河原に来ていたこ
こは本当にいい場所だ俺のお気に入りポイントに追加しよ

???「ゆーおーまいしん、ゆーおーまいしん」

俺「ん？こんな朝からランニングかぁ～すげえ～なつて・・・も
しや」

そこには赤いポニーテールの女の子がタイヤを引きずりながら走っ

ていた

そう川神一子だった・・・

俺「う、うん当たり前だよな俺は今この世界にいるんだからあれ、
なんでかな？なんか景色がぼんやりしてきた目から汗なんてよくないぞ俺・・・やばい、体からは汗はでてないのに目から汗が・・・」
俺はとづくにこの世界に來たことを実感してうれしさのあまり感動
してしまったのだ・・・

一子「君？なんで泣いてるの？大丈夫？」

俺「！？ いや、そのなんというかちよっと思ひ出し感動を・・・
あははは」

そうこうしてる間に一子は俺の所に近寄って話かけてきたようだ、
俺の挙動不審っぷりまじっペーわ

一子「私は川神一子！！君の名前は？」

俺「俺の名前は後藤明」

一子「明君っていうんだ、初めて見る顔だけど、転校生？」

俺「う、うんそうだよちよっと親の都合でね」

一子「そうなんだ、よろしく」

そして川神一子は俺に握手を求めてきた

俺「よろしく」

川神一子の手はとても柔らかかった・・・にしても本当に京といい、
一子といいすんごく可愛かった・・・二次元先輩まじばねえっす・
・本当に一目ぼれしそうになった・・・

俺「んじゃあ俺はそろそろ時間だから」

一子「うん」

そういつて俺挨拶を終えて島津寮に帰ることにした
戻ったときには朝ごはんもできていてそこに雅もいて皆と雑談して
いたようだ

雅「お前どこいったんだよ、ほら、早く飯食うぞ」

風間ファミリー「おお、お前どこ行ってたんだよ」

本当に俺は幸せ者だよ、一日一日が本当に楽しく思える

俺「あ、うんちよつと河原まで散歩しに」

麗子「ほら、今日は記念に朝からトンカツだよ」

キヤップ「うっしやああああ」

俺「（朝からトンカツとはこれまたいかに・・・」

朝飯も食い終わって部屋に戻どつてしたくなどをしていたら雅さんが部屋に入ってきた

雅「よお、今日から学校頑張れよ」

俺「はい、ありがとうございます」

雅「あ、あとな川神百代に勝てる必勝方を教えてやろうか？」

俺「！？」

雅「え、つとまずな・・・」

風間ファミリー「おい明くはやくしろ」

俺「今いく」

そして俺が玄関を開けたら身長が高いムキムキな人がいた、そうガクトだった・・・

おかしいな？また目に汗が・・・出させるか！！

ガクト「お前が明だな？俺様は超モテモテイケメンのガクトだ恋愛に困ったら俺様に相談してくれたまえ」

ガクトはドヤ顔で言ってくれた

俺「ああ、よろしく」

大和「さて、皆集まった事だし、いきますか」

俺は皆と雑談しながら河原までいくと週刊少年ジャソプをもったヲ

タクっぽい人が・・・いや

師岡卓也モロが来ていた・・・

モロ「ん？新入生？」

俺「福岡から引越してきた　後藤明だよろしく」

モロ「福岡かあゝ結構遠いところだね、僕の名前は師岡卓也よろしくね」

俺「ところで、そのジャソプは最新号？」

モロ「そうだよ、みる？」

俺「ありがと」

やつぱ3次元とまったく同じストーリーに全部すすんでいた

ガクト「やつぱお前もトラブルンみるよな？」

俺「いや、俺はワソピースと金魂くらいかな」

ガクト「なんだよ、お前もトラブルンみるよ」

俺「うゝん、考えとくわ」

そういつてワソピース読もうとした・・・ら・・・

【親方あゝ空から人間があゝ】

といわんばかりに空から川神百代が降ってきた・・・

百代「美少女、空から登場！！ん？みない顔が一人いるな」

俺「君が百代さんだね」

俺は今世紀最大の勇気をふりしぼって顔を真っ赤にしてこういった

俺「百代さん、俺と勝負してください！！」

風間ファミリー「「「「「！？」」」」」

百代「お、初対面で決闘かあゝお前なかなかやるなあゝ」

大和「おい、やめとけて命の保証はないぞ・・・」

百代「だがしかし、私はお前の名を聞いていない、あと決闘は今は無理だ学校で放課後やろうじゃないか」

俺「俺の名前は後藤明だ、放課後だな」

多分ざわめいたのはまわりにいる人たちからもざわついたのでろう
そうざわめいてるところにタイヤを引きずりながらポニーテールの
女の子いや、川神一子
がやってきた

一子「皆々おはようどうしたの？」

百代「ちよつとこいつから決闘を申し込まれてな、今日はいいい日に
なりそうだ」

俺「……。」

一子も「!？」みたいな反応したが、まあ今日俺に出会ってこの展
開だからな……

ああ……本当にやっちゃまったよ……雅さん鬼畜だわあ……

真剣で川神百代を倒しなさい（後編）（前書き）

なんかキャラと違った話方しているようで申し訳ないです
意味が分からない文章があつたら申し訳ないです
ついに川神百代と対戦ですね、生きて帰ってこれるのかな？

真剣で川神百代を倒しなさい（後編）

小島先生「今日のHRはこれで終わり気負つけて帰るんだぞ」

はぁ・・・とうとうやってきたのか・・・俺は緊張の汗が止まらなかった・・・

息も荒くなっていて、心拍数も上がっていた。

キャップ「どうした明？冬なのに汗かいて息も荒くなって」

大和「まあ、仕方ねーよなあ姉さんと戦うんだもんね」

俺「い、いや、べ、べつに、そ、そんなことはないぞ？」

大和「今のうちにキャンセルしてきたら？まあ、できそうにもないけど」

俺「俺から受けたんだ、今逃げるわけにはいかない、それに俺もただ単にあのひと決闘を申し込んだわけでもない」

キャップ「いろいろ大変そうだなーお前」

ガクト「おーいモモ先輩きてるぞー」

俺「来たか・・・」

百代「おーい明ー早くー」

俺は黙って闘技場みたいな所までいった・・・

怖い、本当に怖い、逃げだしたい・・・でも、逃げたらどうなるかぐらいわかるまた三次元にいたときの俺と同じだ俺は強くなりたいって雅さんに伝えたんだ！！だからこのチャンスのがすわけにはいかない！！

絶対な！！

side百代

こいつの気はあんまり感じられないがガクトより少し弱いつて感じ
か？

何故あんなに怖がっているのに私と決闘がしたいんだ？

そしてとうとう闘技場までついてしまった・・・

つーかなんだこの観客の多さは？

あーあーこれで負けたらかなりダサいだろうなあ

まあ、いくら川神百代といっても女、そこまで力ないだろう!!

それ雅さんの言うとおりにすれば……てかあのひとなんか俺を

おちよくってないか？

まあいいや

学園長みたいなじいさんがよってきたこの人は川神鉄心さんだな

鉄心「それでははじめええええええええええ！！！」

とうとう始まってしまったか・・・！？

百代「はあー」

ものすごいスピードでパンチがくる、やっぱり化けものだわ……

しかし俺はとっさに雅さんが言っていたことを思い出す

~~~~~

雅「多分川神百代はすぐパンチでくるだろう、そこをでたらめにいから一本背負いでいけ、お前昔柔道やっていただろ？」

~~~~~

たしかに俺は柔道をやっていたおかげで初段だ

俺は思いつき一本背負いの形にはいった

俺「うおりゃああああああああ」

ん？腰が乗ったぞ？脇もがっちり決まっている・・・これはもしかして

百代「!？」

俺は思いつきり川神百代を一本背負いで投げていた

俺は正直驚いた・・・まぐれなのか? いや、雅さんがアドバイスをくれたにしも・・・!?

だとすると雅さんはすごい・・・こんな計算までして・・・

俺「うおりや〜」

俺は投げたあととつさにパンチを繰り出したが・・・

~~~~~

雅「お前はパンチはするな蹴りでいけ、ただでさえ力がないのに蹴りは力が無くても威力はある」

~~~~~

しまった!!

そのパンチは完全に止められていた

百代「よく私を投げたもんだな、だがお前のパンチはへなちょこだ」

俺「なっ・・・」

あの体制から俺は思いつきりはじかれてしまった

かなりとんだだろうな・・・

地面はやっぱかてえわ

俺「いったあ・・・」

そういえば全員がざわめいてるような

あの川神百代を投げたんだそりゃ驚くはずだ俺でもびっくりだ

百代「さて遊びはこれまでだ」

俺「え・・・」

と思った瞬間腹部に尋常じゃないほどの痛みが襲ってきた

俺「・・・ッ」

やばい息できない!!俺死んじゃう!!過呼吸になりそう!!

痛みと混乱がまじりあっていた・・・そしてだんだん意識が遠のい

ていく・・・

やっぱじゃけもんだわあの人・・・いや、ここで負けたら・・・強く
なれないかもしれん・・・

学園長がなにか声をあげて言おうとしているまづい！！
とっさに声をかけた

俺「まだ全然大丈夫です」

思いつきり声を出したはずなのに声はかかれていた

俺はなんとか息できないまま立ち上がることはできた

もう肩で呼吸をするというのはこういう事なのかと思いましたよ

俺「さあ、続けようか」

百代「気に入ったぞ、その精神」

百代はまたかなりのスピードでとびかかってきたしかし1度はあの
スピード見たんだ

俺はでたために思いつきり蹴っていた・・・なんかすごいスピード
で蹴った気がする・・・

百代「なっ！？」

俺は百代先輩の腹部にけりがあたっていた・・・今日は本当にラッ
キーだ

しかしダメージさほど聞いてないようで俺は思いつきり顔面を殴ら
れた・・・そこからは意識がない・・・

side百代

なんなんだあいつ・・・少し油断しすぎたか？

にしてもあの気で2分持つとは・・・この先が楽しみだ

この後俺は黙って保健室を抜け出しあの河原へいったら雅さんがいた
雅「いやあ～お前の負けっぷりは見事だった」

俺「だいたい無理だよ！！あんな化け物・・・」

雅「お前がまさか俺のでたための助言で投げるなんてなしかも蹴り

も一発いれたんだろ？」

俺「え？でたらめ？またまたーそんな嘘を」

雅「いや、本当だお前は確実に強くなれる・・・いいだろう！！今日から俺は明の師匠だ！」

俺「本当ですか！！」

雅「ああ、本当だでも今日は少し休め明日から俺も鬼になるからな、いいな？」

俺「はい！！ありがとうございま・・・」

雅「おいおい泣くなよ、泣くのは百代倒してからだろ？」

明日・・・どうなるんだろうなあ・・・

真剣で青春しなさい（前）（前書き）

皆さん本当にゴメンナサイ！！京のキャラ崩壊注意です！！京が好きな人は読まないほうがいいかもしれません！
読み返したら意味不明な所続出・・・本当に申し訳ありません
進展なしといった所です

真剣で青春しなさい(前)

警告!!京キャラ崩壊注意!!

////////////////////
////////////////////

俺は島津寮に戻って自分の部屋でのんびりしていたところだ

俺「なんだこの手紙?」

雅さんからの手紙だった

////////////////////

弟子入りおめでとう!!ただし、俺の弟子になったら容赦ないから
な?

とりあえずなんとか1年で川神百代を倒せるくらいの強さまでには
仕上げといてやろう

とりあえず今日はゆつくり休め

P・S島津寮の玄関付近にダンベル置いたから今日はそれ10
0回

あと、風呂上がりの柔軟よろしく

雅師匠より

////////////////////

俺「たった1年で川神百代さんまで強くしてやる・・・か」

俺は想像しただけで鳥肌がたった

本当にできるのだろうか・・・

いやあの人は四天王に間違いない！！あの人は絶対そうしてくれ
そうだと

麗子さんから飯呼ばれたので俺は行くことにした

大和「まさか姉さんに1発くらわすとわなあゝ」

キャップ「本当だよ！何者だよ明は」

俺「いやあ、マグレマグレ……にしてもあの人本当に化け物ですな腹部に一発食らったときは死ぬかと思ったよ……」

大和「まあ……姉さんだからね、しょうがないよ」

俺「んじゃあ俺はちよつと筋トレでもしてくるわ」

大和「姉さんのパンチ2発食らったが、大丈夫なのか？」

俺「ああ、この通りだい。．．いつてええええええ！顔面腫れてるじゃん！！」

大和「今頃かよ!!」

じゃっかん腹部も痛いな・・・ジンジンくる・・・

そういえば玄関付近にダンベルが……

俺「あ、これか」

そこには普通のダンベルがあつた

俺「これだなよし……って重たっ！！」

多分10?くらいのダンベルだと思うだろう

これを1000回か・・・力入れるだけで腹部に激痛走るのに・・・

俺「1・・・2・・・はあ・・・7・・・9・・・10!!」

「があー！ー死ぬー！ーこれは本当に辛いぞ！！」

俺「あと9セットかぁー」

30回すぎたあたりから結構汗がでていた・・運動不足だなあゝ俺も

俺「50!!! はあ……はあ……ま……じ……きつい……」

50回すぎたころには汗まみれになっていた

俺「80回だこのやるおおおおおおお!!」

そう叫んで真正面向いたら川上一子と川神百代がたっていた

俺「あ、どうも」

な・・・なんているんだ？

百代「よお、もう元気なのか」

俺「力入れると腹部に激痛はしますけどね」

百代「にしても顔ひどいなーすまん、本気で殴りすぎた」

一子「お姉さまに一発いれるなんてすごいわ」

一子もこちらの会話に入ってきたようだ

俺「偶然ですよ、てかなんで島津寮にいるんです？」

一子「ここ温泉あるでしょ？だから私たちもたまに入りに来ているの」

俺「そうなんですか」

百代「んじゃあまたあとでな。一子いくぞー」

一子「はい」

そいつって川神百代と川神一子は去って行った

俺「さて・・・あと20回だな」

はあ・・・はあ・・・まじ・・・死ぬ・・・

時計を見ると8時を過ぎていたとりあえず風呂に入らねば・・・

俺はさっさと着替えを用意して風呂に入ることにした

にしてもきもちいなあートレーニング後のお風呂は

俺「はあー」

なんかお風呂つてすんごい気持ちいいね、なんだか眠くなるし

風呂をあがって俺は自分の部屋に戻っていたそこには昨日と同じように雅さんがゲームをしながら俺の部屋でくつろいでいたてか、な

んでお面してるんだろ？」

つて四天王でもゲームするんだ

雅「よあ、トレーニングお疲れさん」

俺「雅さん！！どこがゆっくり休めですか！！きつすぎですよ！！」

雅「なあゝにあれくらいで甘ったれんな、明日は5キロ走る予定だから」

俺「なあー！！」

雅「それくら余裕だろ、1年で百代を倒せるくらいになるんだから」

俺「あ、あと技とか教えてくれるんですか？」

雅「お前にはまだ早いからあとでな、んじゃあ俺は新しく始まるドラマ見ないといけないんでじゃあな」

俺「もう帰っちゃうんですか？」

雅「ああ、明日は河原でまってるから」

俺「わかりました！！明日頑張りますから！！」

雅「おう、期待してるぞ」

そうして雅さんは俺の部屋をでていった

今日はもう寝よう・・・いろいろと疲れた

んゝもう朝かあ・・・早めに寝たのに・・・今何時だ？

/ / 6 : 3 0 / /

もうこんな時間かよ・・・どんだけ寝てんだ俺は
とりあえず起きないと

俺は腕に力を入れた瞬間痛みが走った

俺「いたっ！！おいもしかしてこれは・・・」

そう筋肉痛だった1年ぶりの
本当にまいったなあ・・・

キャップ「明々めしだぞ」

やばいどうしよう・・・起きれない・・・

なんとか起きたみたいだ……にしてもいてえ……

ガクト「お前なんか今日はえらくぎこちない歩きかたしてるな」

大和が俺の腕を思いつきりたたいた

「なにすんだよ大和！！」

ガクト「ほーう」

俺「まじやめろってイテテテテ！！痛いから！！ん？なんだあれ」

モロ「また始まつてるね」

俺「？」

DQNA「お前がうちの奴らを潰したんだな？」

DQN B「うるせえ！ぶち殺すぞてめえ」

なんか話しているみたい・・・と思うたらいきなりDQNの方から

とびかかってきた

大和「あーあ・・・」

大和が叫んだ瞬間にはも3人いたDQNがぶつとばされていた
1人は意識あるようだが残りの2人はもう意識がない・・・大丈夫
なのか？

百代「こんな美少女相手に3人もくるとは・・・許せんな」

そう言つて百代さんは関節を外して行つた・・・いやあーグロい！
っーかこんな人と昨日戦っていたのか・・・

ガクト「おいどうした明いきなりすわちまつて」

俺「ちよつとこんな人と昨日戦つたのかつて想像したら腰抜けちゃ
つて・・・」

ガクト「あつははははお前もまた決闘申し込んだら次は命ないかも
な」

どうやら俺たちの会話が聞こえてたらしく

百代「おーい皆ー」

モロ「またはでにやつたね」

百代「あんな卑怯な奴はこうでもしないと、あれ？ワン子は？」

俺「ワン子？」

いや、まあ知ってるけどね一応知らないふりを

キャップ「ワン子っていうのは一子のあだなんだあいつは頭なでると
犬みたいになるからな」

大和「まあ、笛吹けば」

そうやって大和は笛をぴーっと吹いたとたんに一子が現れた

一子「よんだー！？」

俺「うおっ！！」

いつのまにかあらわれる一子・・・やっぱ川神家はとんでもないな
百代「ワン子いかないと学校遅れるぞ」

一子「うん、もうひとはしりしてからいくわ」

そうして一子はまたタイヤを引きずりながら走って行った・・・すげえな

そういえば京は俺とあつていらいだんまりしてるな・・・俺の事嫌っているのだろうか

てあれ？京いなくね？と思っていたら京は大和にくつついていた
あいかわらずだなあ・・・

ガクト「京、おめえ最近元気ないなー」

京「ん・・・」

大和「そういえばそうだな明が来てから」

そこふれちゃう？

京「やまとが私と付き合ってくれたら元気になる」

大和「やっぱいつもの京だわ お友達で」

やっぱ俺の事嫌いなのかなあ・・・俺太ってるし・・・生理的に無理
とかいう奴かな？

そうこうしている間に俺たちは校舎まできていた

突然京が俺に話かけてきた

京「お前さあ・・・私たちに絡まないでくれる？」

俺「え・・・」

真剣で青春しなさい(後)(前書き)

ちよつとシリアスに書きすぎた・・・orz

誤字、脱字多すぎワロタww

いや、笑えませんね。本当に申し訳ありません

真剣で青春しなさい(後)

あ…ありのまま 今 起こった事を話すぜ！

京が俺の所通りかかる瞬間『関わるな』といってきやがった

な・・・なにをいつているのか わからねーと思うが

俺もなに言われたかわからなかった・・・

頭がどうかなりそうだ・・・

催眠術とか・・・超スピードとか

そんなチャチなもんじゃあ断じてねエ

もつと恐ろしい片鱗を味わったぜ・・・

なにいつてんだ俺？それよりどういうことだ・・・

もう意味が分からなかった

俺「京、その話はあとで聞かせてもらおうじゃないかこのままだと納得がいかん」

京以外の風間ファミリー「……？」「……」

どうやら京は俺しか聞こえないようにいったようだ

・・・許せない！！なんだその卑怯な考え方は京お前そんな奴だったのかよ

京「んじゃあ、放課後屋上で」

そして俺は風間ファミリーから走って去って行った 悔しいよ俺・・・

昔の世界でもあんな感じだった・・・今の世界でも結局こうかよ・・・

・
そうやって皆からシカトぶっこまれるようになるんだよな

なんなんだよ、いつたい・・・

俺は1人で教室に入り席についた

俺はまたいじめられた時のような絶望を味わった
でも俺はこれくらいで負けない・・・

大和「おーい明どうしたいきなり変なこといいだして先いつてしま
うとは」

俺「ああ、わりい」

ガクト「京になんかいわれたのか？もしや告白されたのか？」

俺「なわけねーだろー！」

ガクト「ジョークだよジョークー！そんなたくなつて」

そうこうしている間にチャイムが鳴った

???「今日から君たちの担任をするルーネみんなよろしくだよ」

あールー師範代かやっぱそっくりだわ

ルー先生「私は主に体育の先生だからよろしくネ」

この人大和たちが2年では担任もつてないような・・・まあいいか

そして俺は今日福本育郎とスグルの友達になった、もちろん風間フ
アミリーとはしゃべったけどやっぱり京の言葉がつかかってあい
つらと話すのはつらかった

HRも終わり俺は屋上へ向かった

俺「どういう事だよ、俺のどこが嫌いなんだよ」

京「・・・。」

あまり小さくて聞き取れにくかったからもう1度聞くようにした
俺「おい、はつきりいえよー!」

そういつたら京がきれたかのように

京「お前は私にとって邪魔なんだよ!お前みたいな奴は嫌いなんだ
よ!!だから二度と私達とつるむな!!」

俺「・・・。」

俺はため息をして・・・いや涙をこらえて

俺「風間ファミリーの古参がいう事は　はむかえないからな・・・
わかった」

京は走って屋上からでていった

side 大和

なんだ明の奴?

今日は何か様子がおかしかったぞ

まあいいや一応俺も気になるし屋上で聞き耳していくか

京「お前は私にとって邪魔なんだよ!お前みたいな奴は嫌いなんだ
よ!!だから二度と私達とつるむな!!」

京・・・あいつなにいつてんだ!!

明が来てから京の様子がおかしいと思っていたらそういう事だった
のか・・・

京は走ってこちらへ来ていた

大和「京お前・・・」

京「や・・・大和・・・」

俺は無意識に京にビンタをしていた

大和「今日は緊急集会だ」

そうやって俺は風間ファミリーをなんとか呼ぶことができた

キャップ「なんだよ大和」

大和「全員そろったな、じゃあ今日は明と京について話そう」

ガクト「お、もしかして付き合ったのか？」

大和「ガクト黙れ!!」

俺が真剣で怒っていることにみんな気づいたのだろう

大和「京は明がきてから様子が変だと思わないか？今日だって明なんか俺たちとの接し方おかしかったし。それに朝明がくれたのも不思議だったろ？」

モロ「そつえば、そうだね。京なんかしたの？」

京「。。。」

大和「俺は少し気になって屋上に行くことにした」

百代「そしたら京が明に関わるなっていったんだろ、そしてあの時大和がビンタをはなったと」

大和「姉さんなぜしているんだ!!」

百代「私もあのときそこにいたからな」

ガクト「おい、京!! てめえーどういっつもりなんだよ!!」

一子「そうよ京、明なにかしたの？」

そうといつめると京は泣いて言ってくれ

京「怖かった・・・」

キャップ「え？」

京「明が入ったら今楽しい生活が変わるんじゃないかって・・・私は嫌だったの風間ファミリーに新しい人を入れることが」

そついうと俺は京を抱きしめていた

京「!？」

大和「明が変な奴に見えると思うか？」

ガクト「あいつちよつと化け物に決闘申し込んだ馬鹿だけど、すごいやつだったぞ」

百代「ガクトく化け物って誰の事だ？」

ガクト「いや・・化け物じゃなくてびしょ・・・ギヤアアアアアアアアア」

キャップ「あいつすげえ面白そうじゃん」

モロ「そうだよ、僕も明はそんな根に持った奴には見えなかったけどね」

一子「私も明君はとても悪い感じに見えなかったわ、だから京別に変わらないから安心していいわよ」

大和「それでもお前はなにか意見はあるか？」

京「ない・・・」

大和「じゃあお前は謝ってくるんだな。できるか？」

京「うん」

大和「よし、じゃあそろそろ離してくれないか」

京「このままがいい」

大和「おい、お前はまず謝りにいくんだろうがー」

百代「そうと決まればあいつを探さなくてはな」

大和「それなら多分河原にいるだろうよ」

こうしてなんとか京とも解決できたし、一件落着だな

side out

雅「お前なに顔ぐしゃぐしゃにしていってるんだよ、振られたか？」

俺「うう・・・そおんなじやあないんですよ・・・」

雅「じゃあなんだ、俺に話してみる」

俺「今日な京から・・・（以下省略）」

雅「あつはははお前も災難だな」

俺「笑わないでくださいよ！！こちら真剣なんですから！！」

雅「実はそうでもないぞ」

俺「え？」

雅「ちよつと缶コーヒー買ってくるわ」

俺「えちよつとまってくださいよ」

そういつて雅さんはどこかへ行ってしまった

大和「おーーい明ー」

真剣で仲直りしなさい！（前書き）

明もとうとう鍛錬開始！！京と仲直りはできたのでしょうか？

真剣で仲直りしなさい！

雅さんが缶コーヒー買いにいったあと

大和たちが来ていた

もちろん京も

俺「どうした？」

大和「ほら、京」

京「あの・・・その・・・今日はごめん・・・」

俺「・・・」

京「怖かったんだ・・・明が入るといつもの風間ファミリーじゃないような気がして、だけど・・・明はそこまで根に持った奴じゃないし、よく考えたら私逃げていたのかもしれない・・・」

俺「b」

俺は黙って親指を上げた

俺「改めて、よろしくな京!!」

京「よろしく!!」

キャップ「あ、ずるいぞお!!なんか2人で青春しちゃって俺も混ぜろ!!」

モロ「そこにキャップ混ぜたらだめでしょうが!!」

そういつて俺たちは笑っていた

キャップ「よし、こうなりやあ今日は仲直りパーティーだな!!」

俺「すまん、今ちよつと忙しいんだまたいつかその仲直りパーティーをしよう!!」

大和「そうだ!!じゃあ金曜集会のときにしよう」

ガクト「いいな明もまだ俺たちの秘密基地もしらないだろうし」

モロ「そうだね。その時に明の歓迎パーティー含め仲直りパーティー

「うん」

俺「うん、楽しみにしてるよ」

「子、なんだかたのしくなりそうだわ!!」

そうやって皆帰って行ったときに雅さんが来ていた

雅「おおう、ずいぶん顔がさわやかになったじゃねーか」

俺「見てたくせに」

「雅へへっばれちまつたか」

俺「さあ、雅さん！！鍛錬しましょう！！」

雅「そうだなんじゃあ今日は5?の所を6?で大サービスだ!!」

俺「サービスなの……かな？」

雅「つべこべいわず走りやがれこの弟子がああああ」

俺「わわわわ！わかった、わかった」

3?くらい走っただろうか・・・汗が滝のようにでている・・・

俺「はあ……はあ……」

雅「そくと落ちてるぞ、さもなくば……」

そういつて竹刀をたたき出した

俺「いってえ!!! し……ぬ……はあ……はあ……」

雅「ほら！！あと半分！！頑張れ、頑張れ」

俺「ぐおおおおおおおおお！」

雅「なんとか6?走り終えたようだな」

俺「はあ．．はあ．．ちよつと吐いてもいいですか？」

雅「あまり人がいないとこ・っ・っで吐いてんじゃねーよ
！！！」

俺「才□□□□□□! ! うう・・・」

雅「しょうがねーなーったくほら、準備運動はこれまでだ」

俺「準備運動!!」

雅「さあ、次腹筋300回だ」

俺「しぬうゝゝゝ」

雅「ほれどうしたあと100回!!」

俺「1年もなにも運動してないと本当にきつい・・・」

雅「やっと終わったか」

俺「はあ・・・はあ・・・吐いてもいいですか？」

雅「ここではくなあああああああ!!」

俺「ビニールどう・・・オロロロ」

雅「つたくも胃がすつからかんじゃねーのか？」

俺「そうかもしれません・・・」

雅「んじゃあ最後だ、お前は俺の攻撃を避けてもらおう」

俺「なんですと!!」

雅「それいくぞ」

俺「ぐあっ!!いてえ!!腫れてるのに・・・」

雅「こんなすろーのパンチもよけきれねえのかよ!!」

俺「どこがスローですか!!俺軽く吹っ飛ばされそうになりましたよ!!」

俺はいま・・・島津寮に向かってる所だ・・・意識がもうろうと
している・・・

俺「ただいまあー・・・うう・・・」

キヤップ「おかえりー　ってうぎゃあああああああ!!おば
けだあー」

俺「誰がお化けだ!!」

大和「どうしたキャップ・・・っておい・・・本物のお化けを拝めるとは・・・」

京「うわ・・・本当にお化けがいる・・・」

俺「お化けじゃねえええつつてんだろ!!後藤明だ!!うつ・・・吐き気が・・・」

俺は玄関を飛び出しすぐ吐きに行った

俺「オロロロ・・・うういてえ・・・」

ふう・・・なんとか吐き気はおさまったみたいだ

キャップ「お前いつたい何してたんだよ」

俺「鍛錬」

大和「お前本当に姉さん倒そうとか思ってたないよな？」

俺「うん!!今は」

大和「今はってなんだよ」

そこにちょうど源さんが通りかかった

源さん「うわ、こんな時間帯に幽霊か」

俺「源さんまでか!!!!」

どんだけ俺の顔ひどいんだよ!!

俺はとつと風呂に入ることにした・・・ってかちよつと鏡で俺の顔見
てみよう

俺「うわ!鏡に幽霊」

そんなくらい俺の顔は腫れあがっていてひどかった・・・

雅さん・・・鬼畜・・・

俺は飯食うの忘れて気が付いたら寝ていた

俺「うーん・・・今何時だ?それにしても腹減ったなあ・・・そう
いえば俺夜飯くつてやないじゃん!!」

デブあるうものが飯を抜くなど言語道断だ!!急いでなにか食わな

ければ・・・って朝飯まで待つしかねえな・・・

俺は朝起きて柔軟をしていたらとつくにこはんができていた
どうやらジャストタイミングで起きたらしい

俺「おかわり!!」

麗子「明君よく食うねゝほら、まだいっぱいあるから」

大和「そういえば昨日明飯食ってなかったな」

俺「昨日は唇切れてて飯食える問題じゃなかったよ・・・まだ痛いけどね」

そうして俺は準備もして学校へ登校しにいった

ガクト「おーっす皆おはよーって明なんだその顔は!!」

やっぱまだ治ってないんだ

俺「いやあゝ師匠のパンチがきいてさあゝ」

ガクト「師匠!？」

大和「ああゝこの前きてた人だっけ?あの人強そうに見えたか京?

京「うーん・・・気はあんまり感じ取れなかったけど・・・」

俺「(四天王の事は隠そう)」

俺「ま、いいじゃん!!さあ皆いこうぜ」

そして俺はモロ、一子、百代さんに顔の事いじられてなんとか学校
に到着・・・どうせまたいじられるんだろうな・・・

そういえば昨日もだが皆俺を見るなりざわついてたな・・・なんで
だ?

ああああああああああ!!しまったああああああ忘れてい
たああああ!!

そういえば俺一昨日百代さんと決闘したんだった・・・だから俺はこ
んなに有名に・・・

モロ「やっぱ決闘の成果がでてるね」

俺「悪い方にね・・・」

学校は風間ファミリーとスグルとよんぱちくらいとしか話さなかった

スグル「やっぱ女は二次元に限るぜ」

こいつ高１もこうだったのかてか、２次元の２次元ってどゆこと？

そしてHR

ルー先生「金曜からスポーツテストを行うネ、しっかりそれに向けて鍛錬するネ」

スポーツテストか・・・俺最下位決定だな

初めての金曜集会（前書き）

タイトルがいつもより違和感あるのは見逃してください

初めての金曜集会

俺「うう・・・はあ・・・はあ・・・」

雅「おつかれ。明日スポーツテストなんだって？」

俺「そうなんですよルー先生も早く言っただけいいものだ。ってか前から思ってたんですがなんで雅さんそんなに情報詳しいんですか？」

雅「師匠あるものお前のすみずみの所を知らなくてはな、何時に賢者になったのか何時にカメハメ派の練習したのか」

俺「だああああなんでしってるんですかああ。てか痛いからやめてええええ」

雅「お前は本当技とかそういうの好きだな」

俺「だって雅さん教えてくれないじゃないですか」

雅「お前にはまだ早い！！それよりお前はまず基礎を鍛錬することだな」

俺「たちは今なにしてるかって？今は鍛錬中でちょうど？走り終えて少し雑談してるところだ

おかげさまで今日の学校は皆俺を化け物を見るような目で見てやんの・・・痛いねー

俺「てか、雅さん俺の顔どうにかしてくださいよ。もう大変だったんですから！！あと俺この傷ついたまま練習続けると体持ちませんよ」

雅「川神流・・・瞬間回復！！」

俺「なっ顔の腫れがひいていつてる！！てかなんで川神流を・・・」

雅「ドヤア・・・（´・`・´・`・´・`・´・`・´・`）」

俺「はあ・・・はあ・・・きつちい・・・」

雅「はいでは最後のトレーニング 『パンチを避けよう大作戦』」

俺「なんすかそのネーミングセンスは。ってまたやるんですか!!」

雅「そうだよ今日はお前も攻撃してこい!!」

俺「わかりましたそれじゃいきます うおおおおりやああああ」

雅「ふん」

俺「ぎよえっ!!」

雅「ほらほらどうした」

なんだか雅さんとの鍛錬はそこまで苦しくはなかった・・・てか雅さんとの鍛錬は楽しかった

まだ鍛錬したい!!もっと強くなりたい!!

俺はそういう気持ちがどんどん増すようになっていった

俺「うう・・・いてえ・・・」

雅「瞬間回復」

俺「うおおっ!!すげえ」

雅「ほらよ顔はさすがにかわいそうだからな」

俺「あはは・・・もう1歩も動けないです」

雅「なーにいつてんだ、そこでお前が島津寮まで帰ったら強くなれるんだ」

俺は精いっぱい力をふりしぼった・・・

俺「はあ・・・はあ・・・」

雅「うむ、やればできるじゃないか」

意識が・・・もううつとしてやがる・・・

雅「それじゃあ俺は帰るから ほら水」

俺は水を一気飲みした

俺「やつと・・・ついた・・・」

俺はなんとか自分の部屋までたどり着いて着替えをもつてすぐ風呂に入った

さすがに風呂に入らず寝たらいかんからな

風呂から上がって着替えてた時には意識がはんぱじゃなく途絶えていた

俺「うう・・・はやく・・・もどらね・・・ば・・・」
ドサッ

源「おい明！お前こんな所でねてんじゃねーよ！」

俺「うう、ごめん源さん」

源「ったくお前は。ほら手を貸してやるよ」

俺「ごめん・・・」

源「勘違いすんな、お前みたいな巨体が廊下に倒れていたら迷惑だからな」

源さん優しすぎ・・・まじ・・・シンデレレ・・・

俺「んっいい朝だなあ」

どうやら自分、寝ると精神も体も完璧に回復するようです
そつえば今日はスポーツテストだな

俺「柔軟でもしとくか」

そして俺は皆と一緒に通学路へ

ガクト「あれ？お前もう顔治ってるじゃん」
大和「明かなり腫れていたのになパンパンマンがアンパンマンに戻
ってる」

俺「最後の一言は余計だぞ」

京「ナイスツツコミ」

「みんなーおはよー」

モロ「ワン子おはよー」

てかモロいつのまに

ワン子は百代さんと一緒に登校していた

ワン子「あれ？明もう顔治ってる」

百代「！？」

side百代

おかしい・・・あんなに昨日腫れていたのに今日で元通りに治ってる
なんて

しかも昨日も鍛錬してたと思うが

まさか『瞬間回復』！！

それ以外はありえないぞ！

そういえばあいつには師匠がいるとかいつていたなちょっと会って
みたいもんだな

百代「おい明。お前そういえば師匠がいるっていつてたな」

明「ああ、雅さんの事ですか？」

雅だと！？あの世界四天王の1人【郷田雅】 日本で一番強いとさ
れている奴が

ていうかあの入失踪中じゃなかったのか？

百代「そいつに合わせてくれないか？」

明「あー別にいいと思いますよ」

少し手合せしたいものだな

side out

そして俺たちは学校につき朝から始まるスポーツテストに向けて準備運動していた

キャップ「そういえばお前なんか痩せたか？」

俺「おかげさまで3？痩せました」

キャップ「4日で3？！！どんなトレーニングしてるんだよ」

俺「まあ、デブは痩せやすいって言うからね」

大和「いわねーよ！」

そしてスポーツテストでは

ガクト「ちえっ握力80かよ」

大和「俺60だわ」

明「俺70」

そういえば百代さんとかあんな化け物つてやっぱオーバーしちゃうのかね？

そしていろいろやったんが、まあ出来は最悪

恥ずかしいので握力くらいしか皆に見せられません

あとはかなり悪いと思っていてください

スポーツテストも終わり俺たちは下校をしているところだった

キャップ「よし、今日は金曜集会だな」

俺「それじゃあ場所を教えてもらおうか」

キャップ「そうだな」

大和「了解」

そういえば雅さんにメールうつとかねば
結構アドレス帳増えたな

前はあんなにいじめられていたのに・・・ずっと部屋の中ひきこも
っていつも泥沼の人生を送っていて・・・いまじゃ・・・いまじゃ・

俺はもう思い出すだけで涙がでそうになった・・・いかな

ガクト「明なにしてんだよ、早くいくぞ」

俺「おう！」

そしてついた所は廃ビルだった結構立派だなあ・・・

中はとても綺麗で、誰かが掃除しているようだった。そういえばア
ニメでも風間ファミリーが掃除やってるんだっけ？

そして俺の歓迎パーティーそして京との仲直りパーティーをやってく
れた、本当にいいファミリーだよ

百代「あと1年であいつが帰ってくるのかーどこまで強くなってる
んだろうな」

一子「もう1年たつわね絶対お姉さま超えてるわよ」

ガクト「なつかしいな、もう1年か」

俺「あいつ？誰ですか？」

百代「私の本当の弟さ、去年から修行にいつてるが来年で帰ってくるだろう」

俺「へえ、知らなかった。名前はなんていうんです？」

百代「川神隆たかしだ私と同じくらい強いぞあいつは今じゃもう私をとつくに超えてるだろうが 帰ってきて闘うのが楽しみだ」

俺「化け物が2人とか・・・バイオハザードかよ・・・」

百代「ん？化け物が2人？バイオハザード？誰の事いつてるのかな？」

俺「あ、いや間違えましたびし「川神流 正拳突き」ぎゃあああああああああああ、息できない！！息できないですうううう酸素くれええええええ」

モロ「あつはは明もだんだん馴染んできたね」

京「大和も早く私を大和色に馴染ませて（ぽっ」

大和「意味が分からんわ！！」

こうやってワイワイ騒いでいるとキャップいきなり大声でこういった

キャップ「よーし！！今度のゴールデンウィーク旅行いかないか？」

ガクト「おおーいいなそれ俺様も賛成だぜ」

モロ「いいね僕も賛成だよ、明もいくでしょ？」

明「□ × ○ √ + * /」

大和「賛成だつて」

モロ「よくわかったね・・・」

一子「ちなみにどこにいくの？」

キャップ「それはな・・・モロ大好きな秋葉原だ！！」

百代「モロみたいな奴がいつぱいいるところか・・・なんか嫌だな」

モロ「どういふことだよ」

京「旅行としては近くない？」

キャップ「うーんおもしろそうだったんだがな」

大和「名古屋とかどうよ」

明「おお、名古屋かいいな」

モロ「あれ、明もう大丈夫なの？」

明「やっとな酸素するようになったよ、死ぬかと思った・・・」

ガクト「俺様も名古屋がいいぜ」

キャップ「んー皆がそういうなら名古屋にするか」

風間ファミリー「・・・おー！！！！」

金曜集会も終わり俺は雅さんに電話して河原へ

雅「今日のはあんまりトレーニングできないな。ってお客さんかい？」
百代「あなたが世界の四天王、雅さんですね」

雅と百代（前書き）

ちよつと話すシーン変えてみました
誤字、脱字があつたら申し訳ないです

雅と百代

うーむなんか修羅場になる予感俺帰ろうかな

雅

「今日はあんまりトレーニングできないな。ってお客さんかい？」

百代

「あなたが世界の四天王【郷田雅】さんですね」

雅

「お、君は川神百代かな？ずいぶんと大きくなっちゃって」

なんで雅さん百代さんの事しってるの？

というか雅さんの苗字【郷田】なんだ

百代

「!？」

雅

「まあ、覚えてないのも仕方ないよ百代ちゃんが1歳の時に訪れたからね隆君は元気かい？」

百代

「そうだったんですか。隆は今修行に出ています」

雅

「修行か、あつて見たかったものだな」

俺

「雅さんって元川神院だったんですか？」

雅

「ああ、俺は親から捨てられて川神院で育ったからな。百代ちゃんと鉄心さんからよく聞いているだろう」

百代

「はい、世界の四天王だってことは聞いておりましたが・・・行方不明になったんじゃないんですか？」

雅

「ああ、失踪というか少し旅にでたかな　マスコミにも言わずに突然姿を消したからな」

百代

「そうだったのですか・・・しかしなぜ明の師匠なんかに」

雅

「俺はもう鍛えることに飽きた、俺はこの明を強く育てようと思っただんだ」

俺

「え！！でも百代さんに勝たないと師匠にはできないって」

雅

「あれは少し明を試してみたのさ、そこで百代ちゃんに決闘を申し込むだけでも俺はやりがいがあったのにまさか投げたり打撃を食ら

わせたりするなんてね、私は本気で君を強く育てようと思ったよ」

百代

「（だから、あの時私に決闘をいどんできたのか）」

雅

「まあ、そういう事だ明早くしと今日はあんまりトレーニングする時間がないぞ」

百代

「ねえ雅さん」

雅

「ん？」

百代

「私と決闘をしてくれませんか？」

雅

「うむ。。。困ったものだ」

鉄心

「雅よ、久しぶりじゃの」

雅

「げっ！！鉄心さんいつのまに！？」

鉄心

「百代の帰りが遅かったのだから来てみれば。懐かしいのう、それより百代と少し相手になってくれんかね？最近百代は戦いたくてうず

うずしとるんじゃ」

雅

「鉄心さんがいうのなら・・・いいでしょう。明 今日には鍛錬は見学だ」

俺

「お！？雅さんと百代さんの決闘が見れるんですか！！」

鉄心

「ほう、お前さんはルーの所の、百代との決闘見事じゃったぞ」

俺

「ありがとうございます」

鉄心

「にしても明の師匠を持つとはな、少し話を聞かせてもらおうか」

雅

「決闘が終わってからで」

そして俺は初めて川神院にきた観光地ともなってるんだっけ？
にしてもすごいところだなこは

そして雅さんと百代さんは決闘場みたいな所へいた

俺はその周りで見物することにしたなんか川神院の人たちがいつばいでてきた・・・川神院にいる全員がとても強そうだった・・・川神院はすごいな

そしてワン子やルー先生もでていて俺にきづいたようだ

ルー先生

「おお、明こんな所で何をしているネ　お！あれは雅さんじゃないか・・・百代と戦うとは・・・これは見ものだネ」

俺

「俺あの人の弟子なんで、ちょっと見物しようかと」

ルー先生

「！？　そうだったのか、だから百代相手に2分も持ちこたえられたのかナ？」

俺

「あれはまぐれだと思いますよ」

ルー先生と話していると鉄心さんの声が聞こえた

鉄心

「はじめえええええ！！」

一子

「あ、今はじまったわ」

雅

「さーってじゃあ最初の挨拶として」

そついつて雅さんは百代さんを睨めつけた　と　思った瞬間全員が凍り付いていた・・・まさか！！

俺

「雅さん！？　もしや・・・あなた・・・D○○様の技を」

雅

「誰だよD○○様って!!お前は殺気も感じ取れないのか!!」

百代

「なんだこの殺気は・・・いままで初めてだぞ、あまりの殺気で動けん」

雅

「殺気でおしまいと言わないでよね」

百代

「くっ・・・」

百代さんはなんとか頑張つて動いたみたいだ
ものすごいスピードで雅さんにパンチや蹴りを繰り出しているっー
かはええ!!みえねー!

雅

「よっ、ほっ、それっ」

雅さんはそれを笑顔で避けている・・・てか遊んでいるようにも見える

さすが世界の四天王といったところか
まわりを見ると全員が口をあんぐりあけていた
俺も口がなかなか閉じてくれない・・・

百代

「川神派!!」

百代さんはすごいカメハメ派みたなものを打っていた
すげー！必殺技だー！！！！

雅

「おお、なかなかでかい気弾を打つじゃないか、ふん！！」

雅さんは思いつき蹴りで気弾を切っていた・・・切っていた！！
俺の表現のしかたおかしいのかな・・・？
でも俺はこいうすこすぎてこいう風にし説明できなかった

雅

「さて、明！！これが最初に教えてやる必殺技だ、よくみとけよ」

そいつって雅さんはしないをとりだしたそして目をつぶって力を抜
いていた・・・

俺

「なにしてるんですか雅さん！！やられますよ」

百代

「川神流 正拳突き！！」

ももよさんは雅さんの方に襲い掛かってくるこれはやられるだろう・
・

雅

「はっ！！」

！？

雅さんが瞬間移動したと！？

やばい、本当に見えなかった・・・

百代

「ぐっ・・・」

百代さんは倒れた

鉄心

「そこまでええええええええ!!」

雅

「これが俺は教えてやる必殺技【居合】だ」

一子

「す・・・すごいわ・・・何が起きたのかまったくわからなかったわ」

ルー先生

「私もだヨ、さすが世界の四天王ネ」

雅

「そんじゃあ俺は帰りますんで」

そういつて俺を抱きかかえた

鉄心

「こらまつのじゃ雅」

雅

「話はまたこんどー」

俺

「すごいですね．．雅さん」

雅

「ああ、百代は本当に強いな俺も少し怪我しちゃったよ」

俺

「!？」

雅

「ああ、油断しすぎた、5か所くらいはかすっちゃったかな」

俺

「百代さんも百代さんすごい．．．」

雅

「うむ．．．あそこまで強くなるとわ．．．隆が1年も旅にでるといったな．．．」

俺

「それにしてもあんなに居合がすごいなんて」

雅

「ああ、あとお前は殺気もかんじることができんのか!」

そうやって雅さんに殴られた

俺

「いてて、なんか俺には感じとれないみたいです」

雅

「まったく・・・ある意味すごいんだけどな」

俺

「え？」

雅

「どんな人でも俺がさっき放った殺気は誰でも反応するだろう・・・殺気がわからないお前はちょっと有利かもな」

俺

「それほどでもー」

雅

「褒めてねええよ!!」

俺

「いてっ!!」

そして俺は島津寮に戻った

side 百代

「百代、大丈夫か？起きろ」

百代「ん・・・私は・・・」

鉄心「完全に遊ばれておったの」

そうだった雅さんとの決闘で負けたんだった
殺気といいわざといい本当に桁外れだ

百代「なんなんだ最初雅さんが放った殺気は」

鉄心「うむ・・・まさかあそこまで殺気がすごいとわ、わしも一瞬動けなかった。百代ももっと鍛錬しないとな」

百代「ああ、そうだな」

あれが世界の四天王か・・・とてつもなく強かった私もいずれ明にこされるかもしれないな

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6474z/>

真剣でこの世界にやってきた

2011年12月24日08時53分発行